
金魚と万年筆

yz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金魚と万年筆

【Nコード】

N8281V

【作者名】

yz

【あらすじ】

小説が書けなくなった小説家と人間になった少女の話。

金魚の少女

夏目宗一は台所でトマトを切り皿に盛り付け、昼ごはんの準備が整うと、ふと窓の方へ目をやった。網戸越しに見える木の枝には青々とした葉が太陽の光に濡れたようにきらめき、その葉の生い茂った枝から透かして見える隣の家壁はどこまでも白く光を受けている。そしていつ果てることも無い蝉時雨が同時に耳に入ってきた。蝉の鳴き声に夏を感じるとふいに「閑さや岩にしみ入る蝉の声」と芭蕉の句が口から漏れた。

今、こうやって昼食の準備をしているときに蝉の声は耳に届いてこなかった。意識しなくても、耳に入ってくる蝉の鳴き声はいつの間にか生活音の一部となっている。まさに時雨のような鳴き声を僕はついさっきまで感じていなかった。蝉の鳴き声は岩にしみ入るどころか僕の身体にしみ込んでいるのかもしれないと思い、その感覚を芭蕉の句以外でどう表現できるのかを考えながら、トマトをのせた皿と乾燥アミエビをのせた皿を持って居間へ向かった。居間にはすでに宗一自身が用意したご飯と味噌汁、冷奴が並んでいる。そしてそのちゃぶ台の真ん中には金魚鉢が置かれおり、中には小赤の金魚が一匹、水草と戯れるように泳いでいる。

宗一は皿をちゃぶ台に置き座ると箸には手をつけず腕を組み蝉時雨について考える。

居間の扇風機は夏の暑い空気をかき混ぜ、風鈴はただぶら下がったまま音も立てずにゆるい風に揺れていた。意識をすると蝉の鳴き声はより一層鳴り響く。日常の生活音すらかき消すようにはつきりと宗一はその声に耳をかたむけた。蝉の鳴き声はもともと雌を惹きつけるための歌だ。私はここにいます。貴女に会いたい、と歌う恋の歌だ。七日間、命を燃やし尽くすまでずっと歌い続ける。そんな鳴

り止まない恋の歌をこうやって身近に聴いているとその歌は耳にすら届いていない。いや、届いているがそれが当たり前となると別にどうということはない。車の走る音、洗濯機でシーツを洗う音、歩きながらおしゃべりする女子学生の声。冷蔵庫が食材を冷やす幽かな機械音。小川のせせらぎ。枝を揺らす風の音。それらと同じ日常の音の一部だ。けれどこの歌が終わるとき、何気なく耳に入ってくる音のひとつがなくなるといふことだ。やはりそれは寂しいものだろうか。そしてまた聴きたいと思うときもあるのだろうか。夏になると決まって鳴り響く蝉時雨だ。もしもう一度聴きたいと望む人があるのなら、それはもう夏にたどり着けない人かもしれない。そういう寂しさを抱いているのなら、それはしみ入るように閑かに聴こえることもあるだろう。例えば牡丹雪の深々と降り積もる冬の日、真昼にこの歌声を想い出の中で聴く。その音は今とは違って聴こえるだろうか。それとも同じように聴こえるだろうか。きっと人は耳で音を聴くのではない。心で聴くのだ。同じ音でもそれは人によって別の意味を持つ。宗一は硝子窓越しに牡丹雪の降りしきる景色をみながら心の奥底で蝉時雨を閑かに聴く人を想像する。ややあって、そもそも芭蕉の閑けさと自らの思い描く閑けさとかなり違いがあるような気がして「どうも発想が飛びすぎるな僕は」と独り言をいった。

「発想が飛びすぎるって何を考えていたんです？」
金魚鉢の方から女の子の声が聞こえた。

それは澄んだ声で聞くものに涼やかな印象を与える。
ちやぷんと水がなる音が金魚鉢から聞こえると、どこから現れたのか十五、六の女の子がちやぶ台の前に座っていた。

「蝉の声を閑かなものとして聴くにはどうしたらいいのかって考えていたんだ」

「閑か？それは発想すること自体、無理じゃないですか？こんなにうるさいのに」

「昔の詩人にそういう人がいたんだ『閑さや岩にしみ入る蟬の声』
てね」

「耳が悪かったんですよ。でなきゃ、このうるさい鳴き声を閑かな
ものとして聴けないじゃないですか」

「耳は良かったと思うよ。むしろはかり知れないほど幽遠なものを
聴いたり見たりできた人だと思う」

「ふうん。すごいね。じゃあアタシの姿をみたら金魚だってわかる
かな？」

「たぶん、わかると思うよ」

「驚く？」

「たぶん」

「そしたらアタシを見て夏の句でも詠んでくれるの？」

「彼の心の奥底の琴線にふれることができたからね」

「キンセン？それにふれると詩が生まれるの？」

「たとえばよ。本当にそんなものがあるわけじゃない。ただ音を聞
くものと音を響かせるものが心の奥底でお互いにふれあうことで何
かが生まれる」

宗一ははっとしてポケットの中からメモ帳を取り出し、今自らの言
った言葉を書きとめる。

「ねえ、難しい話はいいから早くお昼ごはんにしません？この雑魚^{じやい}
みたいに小さなエビ、美味しそう」

少女は皿に盛られたアミエビを興味深げに見ながら言った。

夏目宗一は新潟の白山町で小説を書いて暮らしている。今年二十代
に別れを告げ、一抹の寂しさとともに三十路入りをしたばかりだ。
三十ともなれば彼の昔からのイメージでは大人であったが、今の自
分を見ていると別に大人でもなんでもないことに驚き、あきれてい
る。医療事務の仕事の合間に趣味で小説を執筆をしていたが、ふと

したきっかけで文学賞に応募したら、最優秀賞を獲りプロデビューを果たした。受賞当時は期待の新人と言われたこともある。宗一自身自分には天性の才能がある、と確信していたが、それも過去のものだ。数年過ぎてみれば運良く最優秀賞を受賞できただけで、これといってずば抜けた才などないことに気づかされた。宗一にあるのはきらびやかな天性の才能ではなく、文を売ってなんとか衣食を得ることが出来る程度の才能だけだった。

人の身の生活には衣食住が必要だ。そのうち衣食は今のところ一応なんとかなっているが、住は少し遠い親戚から格安で借りた家だった。もともと職場が自宅から遠いからといって悩んでいるところに親戚がこの家を借してくれた。それがいつの間にか小説家になり、小説を書くためにここで暮らしている。なんとなく親戚に自分が小説家になったと言い出せず、もう一年が経とうとしている。はつきり言えばいいのだが小説家といっても十代の読者向けのファンタジーをメインに執筆している。とても世間一般からいわれる小説家ではないような気もしていたのだ。なんとも居心地が悪い。そればかりか今は俗にいうスランプだった。文を売って収入を得る物書きのほずなのにとまった文章が書けないでる。さらに宗一の若かりしころ思い描いた青写真では三十にもなれば結婚でもして、次は赤ちゃんを、というはずなのだが、結婚どころか、つい最近、彼女とちょっとしたこと口喧嘩して以来、会えないでいた。このまま小説が書けないのなら収入も危ういし、生活も苦しくなるだろう。結婚なんて夢のまた夢だ。この先の生活がどうなっただけのか皆目見当がつかない。以前は仕事も恋愛も苦しいながらも楽しさを感じ充実していたが、今ではただ苦しさだけがあるという状態だった。

宗一は思う。まるで今の自分は希望とかなうべき夢を抱いて社会に羽ばたいたが嵐のように容赦の無い現実打ちのめされ、羽ばたけず、絶望と砕けた夢の残骸をみて嘆いている若者のようだ。けれ

ど現実には打ちのめされた若者のはまた立ち直り、新たな夢に向かって羽ばたいて行ける体力も時間があるが、今の僕にその体力と時間があるだろうか、と。しかし心配しつつもどこか一方でその苦境の様子を自ら第三者の目で眺め楽しんでいる。夏目宗一という男はそんな妙な暢気さを持ち合わせていた。

「このアミエビ美味しいですね」

「よかった。これなら大丈夫だな。今度からミミズを食べないでくれよ。気持ち悪いから」

「気持ち悪いなんて言わないでくださいよ。美味しいんですよ、ミミズ。きっと先生も気に入るわ。口に入れるとのめつとしてぴちぴちと動くのよ。肌はとろみがあって、ちよつと温かな味がするわ。噛むのもいいけど、やっぱり丸呑みね。だって喉元でくにくにつて

……」

「いや、それ以上言わなくていいから」

そんなときだった。彼女と陰悪になる前に夜祭に行った時に金魚すくいですくった一匹の金魚が女の子になって宗一の目の前に現れた。その怪異に宗一は「金魚が女の子になって現れるとは、まるで室生犀星の『蜜のあはれ』のようだな。もしかしたら今書いている作品は後世に遺る作品になるかもしれない」と思うばかりですんなりと非現実的な金魚の少女を受け入れていた。しかし小説が書けないという現実は一向に変わる様子はない。

「ああ、それにしても涼子さんといつ会えるの？ 恩返しもできやしない」

「涼子とは喧嘩中だから」

「はいはい、いつもその言い訳ですか。そんなの早く謝ってしまえばいいんですよ」

「別に僕が悪いわけじゃない」

「良い悪いなんて関係ないです。男である先生が謝るべきです」

「納得がいかないな」

「納得なんてものは仲が良くなれば忘れてしまいますよ」

「なんだかおかしい理屈だ」

「仲のいい恋人が喧嘩している方がおかしいんです。さあ、今夜でもいいから、さっさと電話しちゃってよりを戻してくださいよ。でないと思返しじゃなくて、化けて出て枕元にたってやりますよ。うらめしやって」

「恩返しの次は化けてでてくるのか」

「そうですよ。だって涼子さんも死にかけたアタシをすくってくれた命の恩人なんですから」

突然現れた金魚の少女は「恩返しをしにきました」そういつて宗一と一緒に暮らし始めたが、別に自らのうろこで反物を織るわけでもなく、裏庭に行つて「ここを掘れば大判小判がざくざくでます」と教えてくれるわけでもなく、ましてや宗一の仕事を手伝うわけでもなく、ただ日長一日、家の中にいて雑誌や本を開いて読んでいたかと思えば、宗一の作つたごはんをごちそうになっていた。

ついこの間は宗一に「お金をくださいな」とおこづかいをせびつて新潟古町へと一人で買い物に出かけた。宗一は金魚がおこづかいをせびつたとき「僕に恩返しをしたいといつていたのだから、何かすごいものでも買つてくるに違いない」と期待して、座机の奥にしまつて置いたなけなしの十万円を持たせたが、金魚が満面の笑みを浮かべながら買ってきたのはティーン向けの女性ファッション雑誌数冊と夏用の天然素材のミュールとビーチサンダルが二足。そして夏物のバーゲンセールのレディースカジュアルウェアがぎっしりつまつた大きな紙袋だった。

「それにしても恩返しをするために僕のところにやってきたんだよね、君は」

「ええ、そうですよ」

「じゃあ、今度僕のかわりにごはんでも作ってくれないか？」

「うーん、ミミズのごはんはんに藻のサラダならできますけど」

「いや、普通の人間が食べるようなのがいいな」

「じゃあダメね」

「君はそもそも作る気ないんだろ」

宗一はあきれたように言った。

その宗一の顔を見て、金魚がおかしそうにくすりと笑った。

>i29282—3265<

特別な借家

昼食を食べ終わると宗一は食器を洗い始めた。泡立てたスポンジで丁寧に食器を洗い、洗い桶の中に入れ、食器をすすぎ、水切りざるに立てかけていく。一連の動作がよどみなく進み、全てが終わるとタオルで手を拭いた。学生時代に飲み屋でウェイターの仕事をやっていたことがあるためか、その姿が不思議と堂に入っていた。その姿を始終みていた金魚が一言「料理だってするし、食器洗いだってするし、洗濯もするし、掃除だってするって、先生ってすごいですね」と宗一を褒めたが、宗一は「僕は作家なんだよね」と少しうなだれた。

「どうせなら、こういうことを君にやってもらって、僕は創作活動に励みたいんだがなあ」

「やりますよ。たぶん、いつかね。今は先生の仕事を見ながら覚えているんですよ。でも今はなあ。絶対、先生の方がうまいじゃないですか。こういうの。だからアタシがやるとかえって邪魔なんじゃない?」

「いや、こういうのはやって覚えないと」

「きれいに出来る自信がついたらね」

「じゃあ自信がついたら君がやってくれ」

宗一はなかばあきらめながら言った。

「そうそう、これからまたパソコンとにらめっこですか?」

「別ににらみ合っているわけじゃないけどね。ああやって物語を創っているんだ」

「でも少しも進んでいないじゃないですか? キーボードを触っている時間よりも腕を組んでいるときの時間の方が長いですよ」
「それは今、僕がスランプだからさ。いちいち悩まなければ文章にならない。なっても気に入らない」

「それでずうっとパソコンの前で腕を組んで一日終わってゆくのか？」
「ああ、ただ黙ってにらんでいるわけでもないし、漫然と腕を組んでいるわけでもない。待っているんだ」

「文章が出てくるのを？ずうっと一日パソコンの前でああでもない、こうでもないと待っているんですか？それってなんだかつらそうですな」

「そりゃつらいさ。もともと出てくるはずのものが出てこないんだ。つらくて苦しい。でもつらくて苦しくても、そこから出てきた言葉が美しかったら救われるじゃないか」

「でも一向に出てこない」

「そう、まるでサハラ砂漠の砂丘の真上に立ってシャベルで井戸を掘っているみたいに救いが無い。でもいつか以前のように言葉が湧き出てくると思っている。もしくは慈雨のように降り注いでくれるかも。それを期待しつつ頑張らなきゃな。そうじゃなきゃ砂漠の真ん中で倒れてしまう。ひたすら掘り続けるしかない。引き返す体力だって無いんだから。もしダメだったら……僕は失業だ」

「ちよっと気を張りすぎですよ。たまには息抜きをしないと。ねえ。散歩にでもでかけませんか？」

「今はそれどころじゃないんだけどな」

「でも待っていても一向に出てこないんだったら、息抜きも必要ですよ。第一、乙^{おっ}なものでしょ？夏の日に金魚と一緒に散歩なんて」

「いいかもね。でももう少し頑張ってみるよ。散歩なら夕方がいい。今、外へ出て暑いだけだよ」

そう言って宗一は居間にある座机の前行き、片麻縮の夏座布団に座って座机の上にあるノートパソコンを立ち上げた。外から聞こえる蟬時雨の間に少し機械音が混じるが聞こえる。

「じゃあ、アタシはちよっと出かけていいかな？」

「どこへ？」

「古町に。前にあそこでいい日傘見つけたんですよ。こう毎日毎日

暑くちやうろこが乾いて出かけることもできないし。身体だって壊しちやいそう。だから先生、一万円でいいんでおこづかいください」「はあ」と宗一は少しため息を漏らしながらも座机の引き出しから一万円を取り出して金魚に渡した。

「ありがとうございます」

「無駄遣いはしないでくれよ。今、僕は厳しいんだから」

「いつになったら厳しくなくなります?」

「書けるようになったら、ちょっと楽になるかな? もし書いたものがベストセラーになったらすごく楽になる」

「そうしたら大きな水槽を買ってください。金魚鉢じゃあ、ちょっと狭くて」

「いいよ。書けるようになったらね」

「じゃあ、いつてきます」

「車には十分、気をつけて。あと水はミネラルウォーター以外飲むなよ。水道水を飲んだら、また、げえってなっちゃうぞ」

「はい。気をつけますよ。いつてきます」

○

金魚がいなくなるとこの家は独りで住むには広すぎるということに宗一は気づかされる。

もともとこの家は宗一のお爺さんの弟が暮らしていた家だ。その人の名前は夏目大介という。今年八十五歳になる。子供は娘が三人いた。三人とももう五十代になっており、その誰もがこの家に住まず県外に嫁いでいた。大介は八十歳に入ったばかりの頃に妻に先立たれ、それから独りでこの家で暮らしていた。生活費は年金と近所にある小さな工場に手伝いとして働かせてもらって収入を得ていた。さすがに八十の老人を独りにしてはおけないと娘たちが話し合った

末に長女が父親を引き取ることを決意し、大介に嫁ぎ先の埼玉に来るように言ったが大介はがんとしていることを聞かなかった。「こは>特別くな場所なんだ」それが大介の口癖だった。けれど、お盆のときに本家に帰ってきていた大介に宗一が「職場と家が離れてるので、もし引越しをするのならここを使わせてもらえないか」と何気なく言ってきたときに大介は「宗ちゃんの頼みならば」と素直に長女の世話になることを選んだ。そのとき親戚一同「頑固者の大介さんがよくもまあ」と呆氣にとられながら笑っていた。親戚のみんなは大介のいう>特別くの意味を大介自身の想い出の場所と捉えてたのかもしれない。赤の他人が住むのは嫌だが、気の置ける親戚ならば嫌でもない。いつでも気軽に想い出のある家に帰れる、と。けれど宗一はそうは思わなかった。「もしかしたら大介おじさんの>特別くというものに自分は属しているのかもしれない」と思っていた。大介のいう>特別くの意味は今日もわかってはいない。ただここに住まわせてもらえたのは作家になった今でもなんだかうれしく思っており、作家なんだから田舎に暮らしてないで、ここから離れて、何かと便のいい東京に行こうとも思わなかった。

今、ノートパソコンを置いている座机もこの家にあったものだ。大介が家具屋をやっていた仲間からもらった売れ残りの座机ということだが、古びた趣があり、まるで明治の文豪が使っていた座机のように見える。これを宗一は気に入って、自分の仕事机にしていた。そしてこの家には長く人が住んだ温もりが常にあった。それはたまに独りで暮らす身には寂しさを覚えるときもあったが、励ましになることもしばしばあった。

そんな宗一にとって好ましい環境にあるにも関わらず、なかなか文章を書くとなると全然進まない。

「本当に腕を組んでにらんでいる時間の方が長いかもしれないな」と宗一は思った。

環境がいかによからうが、結局文章が出てこないのだ。書くべき物語もあるし、登場人物もそこにいる。けれど言葉としてそれを表現できないし、そもそも想像の中で登場人物が動くことすらない。ただそこにいるだけで書くべき事柄は全て時間とともに消えていく。引っかかりがないのだ。書かなければならない文章はすうっと幽霊のように消えてゆく。本当にサハラ砂漠の砂丘の真上で井戸を掘るようなものだった。そして雨がわずかに降ったところで溜まることなく砂の中へ消えてゆく。それでもなんとかやつのことで文章として書いてみてまとまったものを読み返すとまるで自分のものではないような気がする。それをまた消して一から書き直す。気持ちにはあせるが今、あせっては元も子もないことを宗一はわかっている。だからそれでもキーボードを叩く。

蝉時雨はいつ果てることも無く鳴き続けていた。

魔女の喰らう猫 #1

これは第一稿。

あの人から聞いた話。

売り物になるかどうかはわからないけど。

○

昔々、この地は人の住まう場所ではありませんでした。

川々には龍が住まい気まぐれに天に昇ったかと思えば野を駆け回り、稲穂は刈り取られる前に河童の子を孕み流れてゆき、梨花の冠を抱いた木の実の皇子たちは人魚に恋をして実を結ぶことなく水の中へおちてゆきます。この地は人が住まうには厳しく、むしろ魚や水鳥、そして小さな水棲の生き物たちが喜びの中で住まう水の都でした。

人々はそんな土地のわずかな乾いた土地に田畑を作り肩を寄せ合って住んでいました。そしてその地に水の難がこないようにと人々は神様にすがり神社が多く建てられました。この土地では今でも日本一、神社が多い土地としても有名です。この地の名は古くは越後、現在では新潟と呼ばれています。

古くから新潟では人は水難から逃れようと神社を建てていましたが、神頼みではなく人の力でなんとかできないものかと人は堤防を築きはじめました。天正の年に直江兼統という侍大将が、享保の年に本間屋数右衛門という長者が河川を丹念に調べ、大河津に堤防を築けばこの土地の河川を制することができると確信し、何度か挑戦をしましたが、技術もお金も不足していたため結局失敗に終わりました。

けれど人はあきらめず、少しずつ少しずつこの地の水の氾濫を抑え、新たな土地を開墾し、人が住みやすい実り豊かな土地に変えようと治水工事を続け、昭和の年に遂に大河津に分水嶺を築き、この地の河川を制することに成功しました。

人が住みやすい土地になりましたが、この地にもう龍は住まわなくなりどこかの滝つぼに隠れるように身をみそめ、河童もどこかの近づかぬ暗い沼地に潜むようになり、人魚は遠く海のどこかへ引っ越してゆき、あばれ川と呼ばれた川は信濃川をはじめとするいくつかの支流に別れ、細く流れるばかりになりました。

山島^{やまじま}という名の場所がありました。

まだ水の都だった頃から人が住む土地でありましたが、周囲には川が流れていて、土地というより中州に近い土地でした。空の上からみればその形はまるで陸地にある島のように見えたかもしれませんが、水難の多い時には人が集落を築き田畑を作り暮らしていました。周囲を川に囲まれているせいで、他の土地に行くときにはわざわざ渡し舟で移動するしかありませんでした。

治水事業が完成し、人が水難に怯えずにすむことになる、そこに住む人々は不便な山島から一人、また一人と引っ越して行きました。けれど周囲を川に囲まれています。人が大勢住む新潟市から近く、また国道沿いに位置していることから工業団地としての利用価値が見直され、山島に橋が架けられ、山島は工業団地として使われるようになりました。

＞工場島＜それが山島に新たに付けられた名前でした。

＞工場島＜は日本の経済発展と共に発展してゆきましたが、そのことに何ら恩恵を受けず、ただ困ってしまうだけの存在がいました。

まだ人が住んでいたときから飼われていた猫たちです。

昔は猫はねずみを獲るために飼われていた家畜であり、今のように愛玩としてあつかわれていた存在ではありません。引越しの際に荷物としてさえあつかわれず、その辺に放りだされたか、それともただ連れてゆくにも面倒だったかもしれません。いや、あるいは、猫たちの方が別にオレたちは住むのに不便でもないからここにいるとうたた寝でもしながら飼い主が引越してゆくのを横目で見ていたのかもしれない。

けれど人が住まず工業団地ともなると猫たちが食べる物が少なくなりました。工業団地で猫が餌にありつける場所は食堂の生ごみ置き場だけです。得られる食べ物に対して、猫たちは本能のおもむくまま増え続けました。そうすると食べ物不足が深刻となっていき、猫たちは餌を求めケンカをし、勝ったものはなんとか食べ物にありつけ、そうでないものは骨と皮だけの痩せ細った姿になってゆきました。

そんな猫たちのなかに＞彼くがいました。

この頃、＞彼くにはまだ名前がありませんでした。もともと猫は名前を持ちません。そもそも名前なんぞは人間サマが勝手につけるもので猫たちには別に名前がなくても不自由しませんでした。どうしても個人を呼びたいときは毛色か体型を言えば通じるのです。「その三毛」「おい、チビ黒」「よう、デブ赤」という具合です。ですから今、彼の名前を＞彼くと書きます。＞彼くが名前を得るには結構な歳月がかかりますので。

「オレにとちゃあ、水といったらいつも虹色に光ってたな。あれは工場から油かなにかが漏れて水溜りに混じっていたんだろうけど、その頃のオレにはそっちの方が普通だった。逆に今でもなんにも混

じつてない味気の無い水の方がおかしいんじゃないかってたまに思う」

＞彼くは昔を語るときよくこの話をします。＞彼くは子供の頃の話はあまりしません。単純に記憶がないのか、昔のこと過ぎて忘れてしまったのか……ただ＞彼く昔のことを訊ねられるとこう言います。

「おそらくオレは＞工場島く^{たてがみ}に捨てられたんだ。だって島の猫にや、オレの他に灰色の長毛の猫なんていなかったからなあ。そうそう、オレの一番古い記憶のハナシだ……その日、暑くてなあ。どうにも喉が渴いていつものように油の混じった水を飲もうとした。けれど、どういうわけかオレは水を飲むより先に、水面に写った自分の姿を見て思ったんだ。『オレにはライオンの血が混じっている』って、だからこの鬣たてがみのような長毛があるんじゃないかってな。いや、思ったとは違うな。悟ったんだ。うん、そっちに近い。そして『ここはオレがいるべき場所ではない』と確信した。ライオンは惨めに水を飲んだりはしない。全てにおいて雄々しくあるべきだからな。そう、今思えば勘違いしていたんだ。ライオンなんてそうそういるわけでもないしな。猫と交わるわけではないし。そもそも、ここじゃ虎だって山猫だっていない。けれどそのときの勘違いは勘違いであつても、決して間違いじゃなかった。だからオレはここにいるし、魔女の心臓を喰らうことに賛成した。魔女を喰らうなんて穏やかなハナシじゃないな。まったく猫らしくないハナシだ」

黒電話

今年の夏は駆け足でやってきた。雪解けとともに暖かな春の陽気は少しずつ暑くなり、雨を降らすまでいかないう灰色の雲がまばらに空を覆うだけの梅雨を過ぎると雨雲を吹き飛ばすような日差しが青い空を照らし、そのまま今日に至る。

宗一ははかどらない執筆に一区切りがつくと、ため息を漏らしながらリムレスフレームの眼鏡を外し、疲れた目を軽く揉み解した。そして首にかけてあってタオルで額の汗を拭う。部屋にはエアコンはなく、少し年代ものの扇風機が透明な青い羽を回しながらゆっくりと左右に首を振って夏の熱気をかき混ぜていた。執筆するのにはいささか適さない環境かもしれないが、宗一はエアコンが苦手だった。まず喉をやられる。体が弱いとか、体質に問題があるわけではない。アレルギーひとつなければ持病もない。健康な方だ。単純に体に合わないのだろう。医療事務の仕事をしたときには職場のエアコンのせいで夏場はいつも喉をやられていた。だから真夏だろうともエアコンをつけようともしない。もっともこの家にはエアコンがなかったが。

しかしこの暑さの中での執筆だ。さすがに喉が渴いたのか、宗一は台所へ行き、麦茶を飲んで喉を潤した。そして再び居間に戻る。そのとき卓袱台に置かれたままの金魚鉢が目に入った。そこには水の中に白い砂利と水草があるばかりで他には何もない。金魚がいない。金魚鉢は風変わりな置物として卓袱台を飾っている。

「金魚はまだ買い物か」と独り言を言いながら時計を見るとすでに五時を少し過ぎていた。昼に出てから随分時間が経っている。前に買い物に出かけたときも遅かったが、さすがにこれだけ遅いと「途

中で野良猫に追いかけているのか。まさかまた間違って水道水でも飲んでしまったのか。それとも迷子になっているのか」と心配にもなってくる。金魚の買い物に出かけた古町は家から歩いても十分くらいのところだ。とりあえず探しに行こうと書きかけの文章を見直しせずにそのまま保存した。

ある程度、まとまった文章ができあがったが問題はこの文章が使えるかどうかだ。悩み始めると、今書いた文章が気に入らなくて、また一から書き直したくなるもののような気もする。正直、今は読み直すのが少し怖かった。

いつから書くのがこんなに苦になるようになったのかわからない。昔はもっと自然に書けたはずなのだ。文章や物語は自らの深いところから出てくる。それは深い井戸のようなものだ。暗く光の届かないところから湧き出している。以前はその深い井戸から地下水を汲み上げるように桶を投げ入れ、力いっぱいロープを手繰り寄せると桶には満杯の水が入っていた。それが今は何の引っ掛けも無い。水を汲み上げようと桶を投げ入れる。けれどロープを手繰り寄せると空桶がそのまま手元に戻ってくるような感覚だ。何も手ごたえが無い、もどかしさばかりが募る。

そんなとき電話が鳴った。

この家で携帯電話以外の電話が鳴るということは家主からの電話だと思って間違いない。

その電話はファックスもついていなければ、ナンバーディスプレイという気の利いた機能もついていない。通話のみの機能しか備わっていないダイヤル式の黒電話だった。この家と同じく時代から取り残されつつ、けれど温かみ失わず備え付けられていた。

宗一は受話器を取った。

「もしもし、宗一です」

「宗ちゃん、元気？直子ですけど」受話器から聞こえる声はこの借家の主の夏目大介ではなく、その娘の直子だった。もう五十を越え、旦那さんは定年退職して、第二の人生を満喫しているらしい。「あとは三十路半ばの一人息子を結婚させれば楽になる」と宗一と話す度に笑いながらいつていた。宗一は自分に対しても早く結婚したら、といわれているようで話す度に少し居心地の悪さを感じていた。

「実はね。ちょっとお願いがあつてね。お父さんのことなんだけど……最近、ボケちゃったみたいなのよ。ぼんやりすることが多くなつてきてね。外に出て日長一日、縁石に座ったまま景色を眺めてるだけとか。趣味でもあればいいんだけど散歩だけじゃあねえ。そうそう、昨日土曜だし、たまにはゆっくりと大きなお風呂に浸かりたいなあと思つてお父さんを風呂屋に連れていったのよ。そしたらね。旦那が言うにはロッカーの鍵に番号があるじゃない？あれとロッカーの番号を合わせることができないみたいなのよ。しきりに手元の鍵の番号を見てロッカーにある同じ番号を探すんだけど探せなくなっているの。旦那がついてないともう駄目なのよ。さすがにまだ迷子にはなつたことないけど。もう時間の問題かも。でもね。お盆に新潟の実家に帰るってきかないのよ。それなのに私たちはお墓参りした後、すぐまた帰らなきゃいけない用事ができちゃつて。けどお父さん独りにすると危なそうで。だから数日だけ一緒にいてくれないかな？まだお盆までかなり日はあるけど、こういうことは早めに耳に入れておいた方がいいかと思つて」

「いいですよ。お盆くらい僕も休みますから」

「ほんとに？忙しくない？」

本当は小説が書けず、締め切りも迫っていて忙しいのだが宗一は断れなかった。大介は賃金無しでこの家を貸してくれている家主だし、そもそも宗一は大介に対し、実のお爺さんと同様の親しみを抱いていた。「少し痴呆がでてきたくらいなんてことない。むしろ、これを機会に少しの恩返しになつたらいい」というくらいにしか思つて

いない。

「ありがとね。ほんと恩に着るわ」

そして少し当たり障りの無い世間話（宗一に気を使ったのか、たまたまなのか結婚に関しての話はなかった）をした後にありがたそうに宗一にお礼をいって直子は電話を切った。

「大介さんか」

大介は毎年、お盆になると宗一の実家に来ては色々話をした。お盆という時期もあったかもしれないが、大介が宗一に話す話は先の大戦で衛生兵として満州に行ったときの話をよく聞かせてくれたものだ。

満州で皮膚病が流行ったことがあった。その皮膚病になぜだか知らないが日本の歯磨き粉の中に入っている成分が良く効くという噂が中国人の間で流れた。そのとき衛生兵であった大介は歯磨き粉の手配も任されていた。その役目を利用して歯磨き粉を少しずつ中国人に横流しして小遣いを稼いでいたとか、いよいよ日本が満州から撤退しそうになってきた頃、兵士への食糧も少なくなってきた。大介はひもじさのあまり仲間と一緒に中国人の家に強盗に入った。暗がりの中、土に入れてあった壺を見つけ、それを大急ぎで奪い、闇夜の中で食べようと口まで持っていたらどうにも臭くてたまらない。明かりをつけて見てみたら便器だった（当時、満州で便所は家の一角の壺の中で用を足していたらしい）。手を糞まみれにしたまま仲間と「こりゃ、天罰だ。悪いことはできないもんだ」と笑いあったとか、満州から撤退後、九州で対空砲へと配属された。けれど対空用の砲台はあっても物資が圧倒的に不足していたため一向に弾が運ばれてこない。いつも米軍の爆撃機が通り過ぎるのを望遠鏡から覗くだけだった。けれどある日、仲間が望遠鏡を覗いていて面白そうに叫んだ「あのパイロットは髪が長いお。ありゃ女だな。皮肉なもんだ。あっちは金玉が無いのに落とす弾はある。こっちは立派な金

の玉がふたつもついているのに撃つ弾がない」(当時のアメリカ軍に女のパイロットはいなかったはずだ。おそらく軍服の襟についたボアが髪にみえたのかもしれない) そういつて笑いあっていたのを上官に見られ、ぶん殴られたとか。

そんな話を大介は独自の語り口で面白おかしく話した。その戦争の話は宗一が授業で習ったものとは違っていた。大きな流れとして知りうる戦争ではなく。その中で生きた人の体験談はやはり面白い。けれど戦時中だ。暗い体験談もあったはずだ。けれど宗一はそんな話を大介の口からは聞いたことがなかった。ただ大介自身の体験を面白そうに話した。その面白い体験談だけでないもう一方の体験談があるはずだ。そのことを宗一は知りたくはあっても一切触れなかった。面白おかしく話すにはわけがあると思っていた。面白おかしく話して暗い過去を忘れようとしているのか。どんな暗い過去も半世紀も過ぎ去って、それを遠景として眺めるのなら面白おかしく笑い飛ばせるものなのか。宗一はそういった疑問をもったことがある。けれどその疑問を疑問のままにして、遠く過ぎ去った満州へ思いをはせた。それが疑問の答えに一番近づけそうな気がしていた。

そんな大介がぼけてきた。宗一が物思いにふけていたときの玄関の戸が思いっきり開き、金魚が駆け込んできた。買ひ物袋とバッグ、日傘を大事そうに抱え、怖いものにでも追いかけられでもしたかのように、はあはあと息を弾ませている。

夕涼み

「ああ、怖かった」

「おかえり。君は現れるときはいつも唐突だな」

「唐突なもんですか。こっちは怖い目にあっただからです。ああ、もう！」

「なにがあっただ。そんなにあわてて。水でも飲んで落ち着いたらどうだ？」

宗一の言葉に金魚はバッグの中のペットボトルを開けぐいっと飲んで、大きく深呼吸をする。

「ふう」と息を吐いてから玄関から外を見た。まだ日は高く太陽の日差しが辺りを照らして影も黒く地面に落ちている。そのほかにないのを見て金魚は胸に手を置き、ほっとしたような顔をした。

「ほんと、びっくりしたんですよ。今日は買いたい物が決まっていたから早く買い物が終わって、時間をみたらまだ早かったです。それで家に帰っても先生は小説を書いているんだろなあとと思いまして、ちょっと時間つぶしにウインドウショッピングをしていたんですよ。古町のアーケードはいいですね。ほとんどシャッター街になっていて少し寂しい感じもありますけど、そのぶん個性的な店が多くて、ちっとも飽きない。それでつい時間忘れてしまっただけ早く帰ろうかってときにですよ。男の子ふたりに声をかけられたんですよ。『ねえ、ひとりでいるの?』とか『ちょっとよかったら一緒に花茶でも飲まない?』とか、全然知らない人なんです。それなのに馴れなれしく話されて、やんわりと笑顔で断ろうとしたんですが、しつこいんです。だってアタシ花茶なんて飲めないし、ご飯やパンなんて食事だってできやしない。どんなに断っても、笑顔でしつこくて話してきて。最初は親しみ深い笑顔に見えてただけで、その笑顔だって作り物に見えてきて。なんだか怖くなってきたんで

す。だから『アタシはお茶なんて飲んだら吐いてしまうわ』『それに食べるものといったらミミズが一番好きなんです』っていつてあげたわ。ほんと普通の声でいうつもりだったけど、興奮してたみたいで大きな声になっちゃったみたい。道行く人がみんなこちらを見るの。ちよつとびっくりしてそのまま家に向かって駆けたんです。でね。駆けてる最中にあの人たちだって悪気があって声をかけたわけじゃないのに、アタシのせいでみんなに変な目で見られみられて大変だったかな。でも初対面なのになんであんなに馴れなれしかったんだろう。そんなふうと思うとなんだか頭の中がごちゃごちゃしてきて、またさつきとは違った怖さができてきて……」

「怖がる必要はないよ。そりゃ、ただのナンパ」

「ナンパ？」

「そう、かわいい女の子に声をかけて一緒に遊ぶこと」

「そっか、なら怖がらないでついていけばよかったかな。なにも食べられないけど、お話くらいはできるしね」

「それは君次第だね」

「だってかわいいから声をかけられたなんてうれしいじゃないですか？あ、でも今日は先生と散歩をしにくからどのみち行けないか」「かわいいって思われればそれでついて行くのか。君は？」

「そう、だって金魚はかわいい、きれいっていわれるために存在してるのよ。金魚は人間が美しいと思える魚同士を掛け合わせて姿を変えてきたの。アタシたちはただの赤いフナじゃない。ましてや川や海にいる魚じゃない特別な魚」

「そう言ってもかわいいといわれただけでついて行くのは止めた方がいいぞ」

「あれ？妬いてるの、先生」

「いや、危ないからに決まっている。調子に乗って、お茶を飲んだり、食べなれないものを食べたらまたお腹を壊すぞ。ただでさえ身体が弱いんだから、君は」

「はいはい、ご心配ありがとうございます。そうそうついに買いま

したよ。日傘、見てください」

そういつて買ってきたばかりの日傘を開いた。生成りの白地にふちにレース模様があり、そのレース模様のところに黒と赤の琉金の金魚の刺繍がしてあった。金魚はそれを見ながら満足そうにゆっくりとくるくる傘を回す。するとふちの金魚がゆっくりと生成りの白地の上を泳ぐように回った。

金魚は「ね、いいでしょ」と自慢げに笑う。

「本当は日傘は黒地の方が紫外線を通さないから黒の方がいいよってお店の人にいわれて、同じ模様の黒字をすすめられたんですけどね。黒だと闇夜に金魚が泳いでいるようじゃないですか？それだと楽しくないなあって。白地だと明るくて夏らしいじゃないですか」

「うーん、僕は闇夜に金魚っていうのもいいと思うけどね。夏の夜に金魚鉢にひっそりと泳ぐ金魚なんて涼しげだと思うよ」

「ああ、もう。今更、そんなこといわないでくださいよ。結構、迷ったんだから」

「いやいや、こっちもいいと思うよ。そうそう、そろそろ日も傾いてきたし、散歩にでも行くか」

宗一は車の鍵を持って車庫の方へ歩いていった。

金魚は日傘を見ながらまだなにか言いたそうだったが、くるくる回し日傘のふちにいる刺繍の金魚がゆっくり動くのをみて「うん」と納得したように頷くと宗一のあとを追った。

宗一は車に関してはあまり興味が持てなかった。

宗一が車に求めるものは必要最低限の走行性、くせのない操作性、そして食料品や生活雑貨などの買い物を入れるのに困らない収納性だけだった。あとは色が何色であろうが、フォルムがどうであろうが、どここの会社が作ったものであろうがお構いなしだった。傷がついていても致命的な傷でなければ平気な方ですらあった。だからごく最近まで中古のトッポに乗っていたのだが、車好きの友人に「そ

れでいいのか？」と眉をしかめられた。

しかし、さすがに古くなり故障が多くなったので新車に買い換えることになった。それで友人に相談したら「今、俺の乗っているのをやるよ」と白のラパンを一般の中古価格よりやや安く売ってくれた。「まだ二年も乗ってないじゃないか。いいのか？」と宗一が言う。「いや、飽きたから買い換えようと思っていたんだ」と答えられた。車が飽きたから買い換える、という発想が宗一になかったので「車って高価なものだし、飽きたら買い換えるという発想は僕にはないな」と以前、眉をしかめられたお返しにやや皮肉をこめて言った。「ステータスだよ。車は。高価なものだからステータスになる。ステータスは流行によって変わる。だから飽きたら買い換えるのさ。そもそも自分の好きな車に乗るってある種の自己表現なんだよ。小説家なんてやっていればこの辺わかるだろう？」友人は笑って言った。

「もつともラパンは元カノが好きだったから買ってしまったんだけどな」

「それって別れたから買い換えるんじゃないのか？」

「いや、飽きたから買い換えるんだ。間違いない。それを証拠にラパンに乗ってもつまらないだけだ。ちつとも買ったときのような高揚感がない。だから今度買う車は俺自身のステータスになるようなのを買う。完全に俺の趣味の車。そっちの方が絶対楽しい」

宗一は友人の言葉に興味を持った。けれど車自体に関しては相変わらず興味が持てない。というか、あまり深く考えないようになっていた。ラパンを始めて涼子に見せたとき「ラパンって女の人だと思っていた。いや、宗一に合わないとかそういう意味じゃないけどさ」といわれたせいもあるかもしれない。

そのラパンに金魚と一緒に乗った。

「散歩ってドライブですか？」

「いや、海まで行こうかと思ってさ。海って見たことある？」

「ううん。話には聞いたことあるけど」

「金魚は海にはいけないからな。せっかく人間になれたんだから見
ておくものいいかもよ」

金魚は「ふうん」と少し楽しそうに車窓から外の景色を眺めていた。
宗一の家から海までは近い、坂道を登り、住宅街を抜け、護国神社
の林を抜けるとすぐだった。その途中、家と住宅街の間に宗一が昔、
勤めていた職場の新潟大学病院があった。七月といえば夏休みやお
盆前で先生方の休日調整などで忙しいはずだった。宗一はまだ病院
内で働いているであろう涼子のことを少し考えていた。そして自分
は小説家になっていなければ、まだあそこで働いていたのだと思っ
と、これから海へ出かける自分がなんとなく後ろめたいような気も
する。

「なにを難しい顔をしているんですか」

金魚が宗一の顔を見て言った。

「いや、なんで小説なんて書いているんだろうと思ってさ」

「それは好きだからじゃないんですか？ 以前、そういつていたじゃ
ないですか」

「そりゃ好きでなくてたくさん書いたし、やりがいもある。なんと
か生計も立てている。けど自分の意義を考えたとき誇れるものかと
思うと自信がない。昔は病院の事務員だった。当時はそれは普通の
仕事として目の前の仕事をこなすだけだったけど、今思えば間接的
に人の命を助ける仕事をしていたんだ。けど今はただ読んだ人を楽
しませるだけ。意義だけを考えるとなんだか小説家なんて軽薄なも
ののような気がする」

「軽薄じゃないですよ。充分、意義はあります」

「どんな？」

「先生の書いているものはアタシと同じですよ。きっと金魚なんで
す。人の目を楽しませられるなんて充分、意義があるじゃないです
か。楽しみがなければ人ってどうして生きるんです？」

しばらく沈黙があった。ただ車内はエンジン音だけがあり、無機的

に車は道を走った。その沈黙の後、「うん。確かにそうかもね」宗一は何か重要なものを確認するように深く頷いた。金魚は微笑みを浮かべながら車窓から住宅街を眺めていた。

やがて住宅街を過ぎ、護国神社の林の木々の間から海が見えた。海の向こうには佐渡島がはっきりと見えていた。金魚は「海ってずいぶん大きなものですね」と少し興奮していた。

海に着くと車から降り、砂浜を歩く、空の色は赤く染まり始めていた。

浜辺には多くの人がいた。海水浴から引き上げる人、ランニングをしている人、暗くなったらバーベキューをするのか、クーラーボックスと花火を持って浜辺へいく人、宗一や金魚と同じく散歩をしている人、皆一様に楽しそうに夏の浜辺を楽しんでいた。

宗一と金魚は波打ちぎわを歩く。海からの風は汐の湿り気を運び、波音は涼しさをふたりに感じさせてくれた。金魚は楽しげに打ち寄せる波に足をつけながら歩いていた。

「それにしても人が大勢いますね」

「本当に」

「恋人や親子連れや友人同士とか……ねえ、先生、あの人たちからみたらアタシたちってどんな関係に見えるんだろ？」

「親子かな？」

「年がそれほど離れていませんよね。アタシが『先生』って呼んでいるから先生と生徒かな？」

「生徒がひとりだけっていうのも変な話だよな。年の離れたカップルかな？」

「先生には涼子さんがいるじゃないですか」

「不思議なふたりに見えるのかもね」

「そうそう、アタシが金魚だってわかる人もいるかもしれませんね」
「金魚のおばけと小説家」

「ひとりだけおぼけていうのも嫌だな。先生もおぼけですよ。ずうっとパソコンとにらめっこをしているパソコンおぼけです」

「パソコンおぼけてほどパソコンを使いこなしているわけでもないし。パソコンはなんでもできるけど僕ができるのは書くだけだし。おぼけていったら僕は書くだけしか能のない万年筆のおぼけだ。今は生憎、インクを切らしているけど」

「金魚と万年筆のおぼけ同士ですね」

金魚はくすりと笑う。そして真っ赤に染まった空を見上げ「この色、いいなあ」とつぶやいた。

「アタシのうろこって橙色。小赤で橙色なんてありふれた金魚ですよ。アタシもこんなきれいな色だったらな」

「でも夕焼けの色って綺麗だけど少し儚くて寂しいじゃないか」

「きれいなものってみんな少しずつ寂しいんです。だから心に響くの。アタシもたぶん、そういう存在だから」

金魚はその言葉を口には出さず、目を瞑り、心の中でそっとささやいた。

> i 3 2 0 4 5 — 3 2 6 5 <

魔女を喰らう猫 #2

今、気になっているのが#1の流れで前半がいささか幻想的過ぎるかもしれないということだ。前半を抑えて、後半と同じ調子で全体を調えた方がいいのではないかと少し悩んでいる。後半の雰囲気に合わせて前半がもったいない気がするし、前半の雰囲気に合わせて後半が抽象的すぎる気がする。交互に併せ持って、ひとつになっているのかもしれない。幻想と現実はいっだって地続きだ。うん。今は手をつけずこのままにしておこう。

それとあの人から聞いた話のせいか時間軸をきっちりと書けない。あっちへいったり、こっちへきたり。まるでばらばらの破片の意味を理解しないまま、ただ無造作にかき集めて書いているだけのよう。な気がする。それを書き合わせればひとつの流れになるだろうか。

とにかく今は悩まず全てを合わせてひとつの物語を完成させよう。その後に書き直したいところがあったのなら、それはそのときだ。一から書き直していこう。すべての意味はこの物語の全体像を捉えることができたのなら、少しは理解できるものなのかもしれない。知ったことがたとえ脈絡のないばらばらの破片だとしても、昔はそれは完全につながりがないひとつのものだったのだ。今はひたすら書き続けよう。悩むな泳げ。メダカですら川の流れに逆らって泳いでいる。

○

猫たちの中には食べ物が少ないこの>工場島<を離れ、他の土地に

住もうと考えた者もいました。

けれど、この島から抜け出すためには一本の橋を渡らなくてはなりません。しかしこの橋はもとこの工業団地用に建設されたもので、歩道のような気の利いたものはついていませんでした。しかも昼夜問わず、出勤や帰宅するために走る車や大きな荷物を載せた大型トラックが轟音を立てながら行き来して、その橋を絶えず揺らしていました。

＞工場島＜から逃げ出そうとした勇敢な猫たちは決まってその橋で車にはねられてしまいます。そしてこの＞工場島＜にはわざわざ車から降りて、猫の死体を処理しようとする人などいませんでした。ここ勤務する人たちは轢き殺された猫の死体を哀れと思う余裕すらないくらい仕事熱心だったのです。ですから猫の死体は土に埋められることもなく、ただタイヤとアスファルトにはさまれ、内臓も骨もまとめてぺしゃんこに潰され、何度も何度も行き交う車に轢かれていくうちに、終いには内臓も骨もなくなり、猫であつた痕跡はアスファルトについた黒赤い染みだけになりました。

みずからの亡骸を見せることを嫌う猫たちにとってこれ以上の屈辱はありません。橋は屈辱的な死を必ずもたらす象徴として猫たちに語り継がれました。そしてついに橋を渡りきった猫もいませんでした。また橋を渡ってくる猫もいませんでした。ですから、そのうち猫たちは＞工場島＜以外の世界をあまり考えなくなりました。たまに子猫がねずみを追う夢を見る以外には。

その閉ざされた世界のなかで猫たちは絶望や希望をもつこともなく、工場から出る排気ガスの空気を吸い、油で汚れた泥水をすすりながら、ただ世の中はそうできていると納得していました。彼らにとつてつらさや苦しさ、悩みは環境や境遇に対してではなく、もっぱら食べ物に関してでした。

＞工場島＜で餌を得ることが出来る場所は食堂の裏口の生ごみ置き場しかありません。

その生ごみも昼に出されて、夕方には業者が来て車に積んで持っていかれてしまいます。つまり猫たちが餌を得ることができるのは、そのわずかな間だけでした。その生ごみを猫たちは強いもの、身体の大きなものの順にいただきます。順をおって猫たちが生ごみ食べていくとついには同じ強さもの同士でどちらが先に食べるかでケンカになります。そして弱く、小さく、ケンカで負け続けた猫は餌にありつくこともなく＞工場島＜のどこか暗い場所でひっそりと死んでゆきました。

その猫たちのなかに＞彼＜がいました。

＞彼＜は＞工場島＜の猫たちにはない長毛を持って生まれてきました。他とは違う風貌はみんなに＞彼＜は強者だと思わせるに充分は迫力を出していました。そして他の猫以上に無表情でした。まるで絵に描かれた猫のように表情というものを変えません。ですから猫たちに一目置かれていました。「あいつは他とは違う」「猫だを得体の知れないところがある」と噂され、まだ子猫のころから餌を得るにもケンカをすることなく生ごみをあさり、上等な鰯の骨、秋刀魚の内臓などの食べ残しを悠々と味わっていました。

＞工場島＜の猫たちはケンカに手加減を加えません。一度始まればどちらか一方が怪我をするまでやめませんし、怪我をした猫は弱って死にやすくなってしまう。ですから猫たちはできるだけケンカはさけていました。

ところがさかりの時期の頃です。

＞彼＜は初めて雌の奪い合いでケンカをしました。身体が大きく、迫力もありましたが、初めてのケンカで実は弱いということがみん

なに知れ渡りました。ケンカ慣れしていなかったということもありますが、それを差し引いても驚くほど弱かったのです。

＞彼くは怪我を負いました。後ろ足をしたたかに噛まれ、その足を引きずって歩くくらいです。

とてもではありませんが、しばらく食堂の裏口にまでいけなそうな怪我でした。

それにもう＞彼くは弱者です。食堂の裏口にいけば以前と同じように苦勞なく餌にありつくことはありません。＞彼くは工場の一角にある隠れ家で一人で尻尾を抱いて喉を鳴らしながら怪我の治るのを待ちました。

＞彼くはどうやったら次に相手に勝てるのか考えます。一回できあがった階級ヒエラルキーはなかなか変わることはありません。一度の敗北は＞彼くにとつて致命的ともいえるものでした。ですが＞彼くは負けた悔しさよりも頭の奥で別のことを考えていました。

「ここはオレのいるべきところではない。いや、オレたちのいるべきところではない。猫はライオンの眷属だ。つまりオレたちがいるべきところはサバンナだ。サバンナがどんなところか知らないが、ここのように同族同士がわずかな餌を奪い合うところではないはずだ。ここでは弱いものから死んでゆく。多くの弱い同族を押し抜けて少数の強者のみが生き残る」

餓えて痩せ細る子猫。乳の出ない母猫。老いた猫。そして足を怪我した＞彼く。それらが死にゆき、大きな雄猫や若く素早い猫。ケンカの強い猫が生き残る。正しさも感じます。以前、＞彼くもそこに属していましたから。けれど認めたくない間違ひも感じました。

「猫の爪と牙の向かう先は弱い同族に対してではない。象であり、鹿であり、馬のはずだ」

＞彼くは自慢の長毛を舌で撫でながら思います。そして痛みで熱をもった足を癒すべく眠りにつきました。

「ここじゃない」

＞彼くは強くそう思いました。

＞彼くは眠りにつき、夢を見ました。

雪氷に覆われた針葉樹林で古代象マンモスを仕留める剣齒虎サーベルタイガーの夢を。

灰色の昼寝

宗一はいつもとより緊張した表情で書き終わった文章を出版社に転送した。

転送が終わると宗一は眼鏡を外しながら「ふう」ため息を漏らし「いつも、ぎりぎりですみません」と目をつむりネットの向こうにいる担当の編集者にお詫びをいった。

なんとか季刊誌に載るはずの連載小説のひとつを書き終えた。けれど満足感は少ない。それはただ書き終えただけものだからだ。ただ編集者の意見をもとに作品を書き始め、締め切りに追われ、それになんとか間に合ったに過ぎない。宗一は思う。これは本当に世に出すべき作品だったのかと。校正は済んだが、今一度読み返せば直したくなる衝動に駆られ、いつそのこと連載なんて止めたくなる作品かもしれない。小説家になる以前、仕事の合間に書いていた作品と今の作品とでは（作品自体の完成度は格段に良くなってはいるが）何が違うような気がする。それが今回のこのスランプでその違いが顕著にあらわれているような気がする。いつも繰り返し思い悩んでいる事が、頭の中を駆け巡る。けれどそういった思考は疲労と一仕事終えた安堵感により長続きしなかった。今はただ何もかもが億劫になっていた。

座ったまま身体を伸ばし、肩を揉み解した後、そのまま畳の上に倒れ疲れた目を癒すために軽くつむった。屋内にいるのだが、縁側からの夏の日差しが強く、目をつむっても目蓋越しに夏の光を感じた。耳から聞こえるのは相変わらず蝉の鳴き声。遠くの方から車のエンジン音が少し聞こえた。疲労の中このまま眠ってしまえような気がする。

「書き終わったんですね。おつかれさま」

いつの間にか宗一の近くにいた金魚が畳の上に膝をつけ、宗一の髪

に触れながらいった。

「君は現れるときはいつも唐突だな」

「こうみえても仕事が終わるのを待っていたんですけどね」

「終わったよ。一応ね。けど今月はもう一本書かなきゃいけないから」

「少し休んだ方がいいですよ。昨日だってあんまり寝てないでしょ。夜、金魚鉢の中で眠っていたら夢の中で電灯の光をみました。ああ、先生はきつと寝ずに物語を書いているんだな、って思いながらまどろんでいたの」

「その頑張りに見合うものができたかといえば自信がないけど」

「あんまりくよくよしないでくださいよ。きつといいものができたと思いますよ」

「そうだいいけど」と宗一は軽く笑い「早くお金を貯めて君に大きな水槽を買ってあげなきゃいけないしね」と金魚に言った。

金魚はその言葉にうれしそうな顔をしたが、何か思い出したように真顔になって宗一の顔を覗き込んだ。

「そうそう、夜、ちゃんと涼子さんに電話をしましたか？」

「いや」

「先生のほか！」金魚はいきなり宗一に向かって怒鳴った。

「仕事にかまけて、まさか涼子さんのこと忘れてたとか言わないでくださいね。そんなに涼子さんに謝るのが嫌なの？それとも仕事と大事な人を天秤にかけて仕事を選んだわけですか？信じらんない」
「そういつてすつと立ち上がり、物悲しげな瞳で宗一を一瞥した後「もう知らない」といつてすつと消えた。部屋にいた少女は消え、かわりに金魚鉢の中に一匹の金魚がふわふわと泳いでいる。」

宗一はしばらく金魚を見ていたが、ポケットから携帯電話を取り出した。

そしてアドレス帳に入っている涼子の電話番号を見てため息をもらした。

デジタルの時計が九時十二分の火曜日を示している。涼子は仕事からだ。

携帯電話をまたポケットに戻し、部屋の真ん中にあるちゃぶ台の上にある金魚鉢を見た。

「ごめん」

金魚はなにも答えず感情を感じさせない黒い瞳で宗一をにらんでいた。

宗一は横になったまま片麻縮の夏座布団を枕代わりにして少し仮眠をとろうと目を閉じる。

「なんだか僕は謝ってばかりだ」と宗一はつぶやいた。

○

宗一は夢を見た。いや、夢というにはあまりに生々しく、ほとんど現実と区別がつかないくらいの夢だ。だが夢の中で宗一はその現実感を夢として認識していた。

その夢は色のない灰色の世界で馴染みのある建物や風景がどこまでも続いていた。けれど、人の姿がまるでない。ふと立ち止まり見覚えのある家の前で立ち止まり、表札を見た。ああ、と宗一は頷いた。これはつい先ほど書いていた小説の世界だ、と納得した。

けれどどこを見渡しても人はいない。ごめんください、といって、誰もいない家に入っていく。そこにはつい先ほどまで人のいた気配があった。テーブルにはご飯と味噌汁、焼き魚。それらが温かいまま置かれている。そしてテレビがついていた。そのテレビの画面は灰色の砂嵐だけが無音で映っている。

宗一はその情景を見て、つい先ほどまであった情景をリアルに思い浮かべることができる。

誰が深刻な問題を抱え、その深刻な問題を誰かが聞き、必死に受け止め、解決しようと頭を悩ます。深刻な問題は常にその誰かを取り返しのつかない段階まで蝕んでゆく。だがテレビには彼らとは違った世界が映し出されている。そこにはその深刻な問題が取沙汰されている。けれど彼らの抱きかかえる問題はテレビに取り上げ、人々に知られ、その問題について多くの人が語る種類の問題ではない。けれど彼らの問題は常に彼らにとって（あるいは彼らの関係する人々にとって）テレビで放送される問題よりもはるかに重要だ。そしてこの世界ではその種類の問題で溢れている。

人のいない世界で宗一は手探りで彼らの息遣いを感じる。あるいは感情、思念を鼓膜を震わせることなく聞き取る。そしてそれを物語として書き綴る。昔は違った。ここは色のある世界で日の光を影を風を感じ、人の生活やぬくもり、人生そのものがあった。

宗一は家を出て夢の中の灰色の街を歩く。

どうせ起きたら記憶に残らず、霧のように掻き消える夢ならばせめて涼子に会う夢ならいい、と思う。

歩きに歩くと崖に出た。眼下には灰色の海がどこまでも広がっていた。そしてその海はうねりをあげ沖合いに流れてゆく。きつと、その遙か沖合いにはもう世界は存在せず、膨大な量の海の水が滝となつてこの世界の終わりに向かって流れ落ちているのだ。

それを見て宗一は「ここで世界が終わっている」と自分でも意図しなかったつぶやきが口から漏れた。

後ろを振り返ると灰色の街はどこにもなく、大きな廃工場が見るものを威圧するかのようにそびえていた。何を造る工場なのかかわからない。ただ工場であることは間違いない。独自の機能性を追求した建物のように見える。その装飾のない壁に工場の名前が書かれてい

たであろう黒色のペンキの染み、安全第一の文字だろうと思われる緑色のペンキの剥げ跡が残っており、大型トラックの荷台がすっぱり入ってしまうくらい広い資材入り口付近には大きな金網でできたコンテナが幾重も積み重なって錆び付いて曲がっていた。そして、灰色の空に向かって幾重にも連なった煙突からは煙を吐き出すわけでもなく、ただ無言で空に向かって伸びていた。

○

肩をやさしく何度か叩かれて宗一は目を覚ました。まだ頭がぼんやりとして気だるい。その気だるさをさらに増さそうとするように外で蝉が鳴いている。そして寝起きにいきなり目を開くには夏の昼はあまりにまぶしかった。光に目を慣れさせるように薄目を開け、肩を叩いたのが誰なのかを見てみた。そこには少女の姿をした金魚が少し怒ったような、けれど申し訳ないような苦笑いを浮かべ宗一の顔を見ていた。

「どうした？ 僕を起こして、なにかあったのか？ それともお客さん？」

宗一が訊くと「もうお昼過ぎですよ。で、あの、その、お昼ごはんにしません？ お腹空いちゃって」と恥ずかしそうな声で答えた。そして「でもアタシ怒っているんですよ」と付け加える。

「怒られるのも無理は無いよな。僕だって僕に怒りたい気分だったんだ」

宗一の言葉に金魚はなにか言いかけた。

けれどそれより先に宗一は「お昼にしよう」と立ち上がり台所に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8281v/>

金魚と万年筆

2011年11月12日06時19分発行